主観的及び客観的課題困難度に基づく幼児の課題選択の分析

田 中 幸 代

Analyses of preschool children's task choices based on the objective and subjective task difficulty levels

Sachiyo Tanaka (545-5 Minamisato, Shime-machi, Kasuya-gun, Fukuoka 811-22)

In this experiment, younger (4-year-olds) and older (6-year-olds) preschool children's task choices were analyzed based on the objective and subjective task difficulty levels. First, preschool children's understanding of the objective task difficulty levels was examined. While most older children understood the objective task difficulty levels, younger children did not. No understandable children's subjective task difficulty levels were checked. Next, younger and older children's task choices were analyzed respectively based on the objective task difficulty levels. As a result, there was no difference between an easy task choice and a moderate or a difficult task choice in both of them. Then, understandable children's task choices were reanalyzed based on the objective task difficulty levels and no understandable children's task choices were reanalyzed based on their subjective task difficulty levels. As a result, younger children chose an easy task more than a moderate or a difficult task. On the other hand, older children chose a moderate or a difficult task more than an easy one.

Key words: preschool children, task choice, subjective task difficulty level, objective task difficulty level.

これまでに、実験者が困難度の異なる課題を提示し、行いたい課題を一つ選択させた場合に、幼児は易しい課題を選択する傾向があることを報告した研究が多くある(e.g., Sears & Levin, 1957; Bialer, 1961; Nicholls, 1980). Sears & Levin (1957) は、4-5歳児19名について6種類の課題を用い、その課題選択を数日を隔てて2回調べた。その結果、第1回目でも第2回目でも易しい課題を選択した者が多かった。このことから彼らは、4-5歳児は成功を保証するような易しい課題を選択する傾向があるとしている。精神年齢5-15歳児を対象としたBialer (1961)の研究では、年齢増加とともに易しい課題を選択する傾向が減少することが見出されている。また、5歳児と7歳児を対象としたNicholls (1980)の研究でも、5歳児は7歳児よりも易しい課題を選択したという結果が得られているのである。ところで、これらの研究で対象とされてきた幼児の年齢段階は、一般に保育園や幼稚園で年少児、年中児、年長児と分けて呼ばれている年齢段階のうちの年中児段階である。ところが、年少児を対象とした場合には、年中児のように易しい課題を選択する傾向があるとの結果は得られていない。例えば、栄島(1973)は、年少児では課題困難度と無関係な課題選択が見られることを報告しているのである。このように、同じ幼児といえども年少児では易しい課題を選択する傾向がみられない原因は何であろうか。

まず考えられることは、年少児では課題選択を行なう際に働くメカニズムが異なる。つまり、年少児は成功志向ではない、ということであろう。だが、2種類の課題が用いられた栄島(1973)で、特に課題困難度の把握がより難しいと考えられる課題の方に、年少児型の課題選択が多くなっていることや、年少児では課題困難度の把握が容易ではないとの指摘(Unzner & Schneider, 1984)があることなどから、次のようなことも考えられよう。年少児にも易しい課題を選択する傾向はあるが、年少児には実験者が設定した課題困難度を把握することが難しいため、課題困難度と無関係な課題選択が見られたのではないかという仮説である。年少児が成功志向であっても、実験者が設定した課題困難度を正しく把握できない場合には、被験児が自分なりに易しい課題を選択したつもりでも、その課題選択は課題困難度と無関係なものになってしまうと考えられるのである。具体例を示そう。実験者が1,2,3の順に困難度が高くなる課題を設定したとしよう。その際、被験児Aは課題困難度を正しく1,2,3と把握し、問題1を選択した。だが、被験児Bは課題困難度を2,1,3と把握し、自己の主観的課題困難度に基づいて課題2を選択した。また、被験児Cは課題困難度を3,2,1と把握し、自己の主観的課題困難度に基づいて課題3を選択したとする。これら被験児ABCの課題選択を実験者が設定した客観的課題困難度に基づいて分

類すると、易しい課題1名、中位の課題1名、難しい課題1名となる。このような場合、被験児AもBもCも主観的には易しい課題を選択しているが、結果として現われる課題選択は課題困難度と無関係なものになってしまうのである。

そこで本研究では、年少児を対象として、課題選択ばかりではなく彼らの主観的課題困難度も調べることによって、“年少児にも易しい課題を選択する傾向はあるが、彼らの課題困難度の非把握が原因で、課題困難度と無関係な課題選択がみられたのではないか”という仮説を検討することとした。また、年少児よりも年長な幼児は、課題困難度を正しく把握できていて易しい課題を選択していることを確認するために、年少児よりも年長な幼児の課題困難度の把握と課題選択も調べることにした。確認のための被験児は年中児でもよいのであるが、年中児に関してはすでに報告があるため、これまであまり対象とされてこなかった年長児を対象とすることにした。

方 法

被験児 年少児40名(男児17, 女児23, 平均年齢は4歳5か月, 範囲は3歳11か月—4歳11か月)と年長児32名(男児14, 女児18, 平均年齢は6歳6か月, 範囲は5歳11か月—6歳10か月)

課題 課題として、3種類の困難度(易しい, 中位, 難しい)のジグソーパズルを用いた。3種類とも同じ馬の形であったが、破片数が異なっていた。年少児用——年少児の年齢レベルにあった3種類の困難度のパズルを決めるために予備調査を行なった。予備調査では、本実験の被験児とは別の年少児39名に破片数の異なる8つの馬のジグソーパズルを行なわせた。予備調査における解決者率が80%, 59%, 3%であったパズルを、それぞれ易しい, 中位, 難しいパズルとみなした。また、易しい, 中位, 難しいパズルの破片数は、それぞれ2, 3, 5であった。年長児用——年長児の年齢レベルにあった3種類の困難度のパズルを決めるために予備調査を行なった。予備調査では、本実験の被験児とは別の年長児43名に破片数の異なる8つの馬のジグソーパズルを行なわせた。予備調査における解決者率が98%, 56%, 7%であったパズルを、易しい, 中位, 難しいパズルとみなした。また、易しい, 中位, 難しいパズルの破片数は、それぞれ2, 4, 9であった。

手続き 個別実験であった。実験者はまず、実験で用いるパズルとは別の説明用の林檎のパズルを使って実際にやってみせながら、破片を組合せて一つの形を作るといったパズルのやり方を説明した。その後、被験児の前に3種類の困難度の馬のパズルを示して、被験児の主観的課題困難度を以下のように尋ねた。“3つの中で一番

易しいのはどれだと思いますか” “3つの中で一番難しいのはどれだと思いますか” “中位のはどれだと思いますか” 次に、実験者は“3つのうち、どれか1つだけやることができます。あなたはどれをやりたいですか”と尋ね、被験児がどの困難度の課題を選択するかを調べた。

結 果

年少児, 年長児における客観的課題困難度把握者と非把握者の人数および客観的課題困難度と主観的課題困難度に基づいて分類した易しい, 中位, 難しい課題を選択した者の人数は、Table 1に示すとおりであった。

1. 課題困難度の把握について

客観的課題困難度を把握している者と把握していない者は、それぞれ年少児では16名と24名であったが、年長児では28名と4名であった。年少児と年長児における両者の割合を比較した結果、両者の割合には差があり($\chi^2=14.94$, $df=1$, $p<.005$), 年少児の方に課題困難度を把握していない者が多かった。

2. 課題選択について

年少児, 年長児の課題困難度非把握者のうちそれぞれ6名と1名は、彼らの主観的課題困難度の順序がはっきりしなかったため、課題選択のデータ分析からのぞいた。¹ まず、被験児を実験者が設定した客観的課題困難度に基づいて、易しい課題を選択した者と中位・難しい課題を選択した者とに分類し、年少児と年長児別にCRを算出して両者の割合を比較した。その結果、年少児では易しい課題を選択した者(19名)と中位・難しい課題を選択した者(15名)の割合に差はなく($CR=.51$, $p=.61$), 易しい課題を選択する者が多いとはいえなかった。また、年長児でも易しい課題を選択した者(12名)と中位・難しい課題を選択した者(19名)の割合に差はなかった($CR=1.44$, $p=.15$)。

次に、被験児を被験児がとらえた主観的課題困難度に基づいて、易しい課題を選択した者と中位・難しい課題

¹ 3つのパズルの中から該当するものを1つだけ指摘できなかった被験児7名については、以下のような手続きを用いた。実験者が“これとこれはどちらが難しいですか”というように、3つのパズルの中から2対ずつを指して尋ね、被験児の主観的課題困難度を測定した(例、課題A, B, Cならば、AB, BC, CAという2対の組合せについて尋ねた)。その結果、4名は質問に対して無言であったり、“わからない”と答えた。また残り3名の答えには矛盾があって、その主観的課題困難度を推測できなかった(例、AはBより難しい、BはCより難しい、と答えたのに、CはAより難しいと答える、等)。よって、この7名については、主観的課題困難度測定不可として、課題選択の分析対象から除いた。

Table 1
Younger and older children's understanding of the task difficulty levels and their task choices

Age	Understanding of the task difficulty levels	Task choices						?	Total
		Objective difficulty			Subjective difficulty				
		E	M	D	E	M	D		
Younger	Understandable	12	1	3	12	1	3	—	16
	No understandable	7	3	8	13	3	2	(6)	24
Total		19	4	11	25	4	5	(6)	40
Older	Understandable	9	10	9	9	10	9	—	28
	No understandable	3	0	0	2	1	0	(1)	4
Total		12	10	9	11	11	9	(1)	32

Note.

? means that the subjective task difficulty levels are unclear.

E means the easy task.

M means the moderate task.

D means the difficult task.

を選択した者にと分類し、年少児と年長児別に CR を算出して両者の割合を比較した。その際、課題困難度非把握者の主観的課題困難度は客観的課題困難度と異なり、課題困難度把握者の主観的課題困難度は客観的課題困難度と同一となる。分析の結果、年少児では易しい課題を選択した者 (25 名) と中位・難しい課題を選択した者 (9 名) の割合に差があり ($CR=2.57, p=.01<.05$), 易しい課題を選択する者が多かった。また、年長児でも易しい課題を選択した者 (11 名) と中位・難しい課題を選択した者 (20 名) の割合に差がある傾向があったが ($CR=1.80, p=.07<.10$), それは中位・難しい課題を選択する者が多い傾向であり、易しい課題を選択する者が多いとはいえなかった。

考 察

年長児では大半の者が客観的課題困難度を正しく把握していたが、年少児では、約半数の者が客観的課題困難度を正しく把握していなかった。このことから、年少児は年長児にくらべて客観的課題困難度を把握することが難しいといえよう。ところで、年少児では何故、客観的課題困難度を把握することが難しかったのであろうか。この点に関して、本実験は十分な調査・検討を行なっておらず明確なことはいえないが、実験を通して実験者に感じられたことを少し述べておきたい。客観的課題困難度を正しく把握できなかった被験児の主観的課題困難度をみてみると、易, 中, 難の順序のつけ方に全体的な共通傾向はなく、個々の被験児によってばらばらな順位のつけ方であった。実験中の個々の被験児の反応を振り返

てみると、個々それぞれの理由で課題困難度を決定しているという印象を受けた。例えば、3つのパズルの課題困難度を尋ねる質問に対して、該当するものを1つだけ指摘できなかったり、“A は B より難しい”, “B は C より難しい” と答えたのに、“C は A より難しい” と答える等、矛盾した答え方をする被験児がいた。ある被験児にとっては易しい・中位・難しいという言葉の意味がわからなかったのかもしれないし、ある被験児にとっては言葉の意味はわかるが、易く中々難という三者関係がわからなかったのかもしれない。また、難しいパズルを選択した被験児が、横向きになっている馬の頭の破片を真っ直ぐに直して“できた”というような顔をして実験者を見る場合があった。この被験児はおそらく馬の頭の部分に着目し、それを真っ直ぐにすることがパズルを完成させることだと感じていたのかもしれない。また、ある被験児は、簡単な馬のパズルを見て“もうこれはできている”とつぶやいていた。課題困難度を尋ねる質問に対して一応答えていたものの、彼にとっては完成している馬のパズルが何故そこにあるのか不思議であったにちがいない。このように、客観的課題困難度を把握することが難しかった具体的原因として、年少児特有のものがあるというよりは、個々人によってそれぞれ異なる理由を有しているように思われた。

年少児の課題選択を実験者が設定した客観的課題困難度に基づいて分類してみると、易しい課題を選択する者と中位・難しい課題を選択する者の割合に差はみられなかった。だが、各被験児の主観的課題困難度に基づいて分類し直してみると、多くの者が易しい課題を選択して

いた。このことから、年少児を対象とした研究で、易しい課題を選択する傾向がみられなかった原因として、年少児が実験者の設定した客観的課題困難度を把握していなかったことが考えられよう。つまり、実験者が設定した客観的課題困難度と被験児のとらえた主観的課題困難度にくい違いがある場合があるにもかかわらず、年少児の課題選択を一様に実験者が設定した客観的課題困難度に基づいて分析していたために、年少児の課題選択は一見易しい課題選択とは異なるものに見えていたと考えられるのである。2歳3か月ですでに成功や失敗の表情をはっきりと示して実験者と競争する例も挙げられているように (Heckhausen, 1973), 年少児ではすでに成功を志向する傾向が形成されていると思われる。

ところで、年長児では年中児を対象とした実験報告のように易しい課題を選択する傾向はみられず、それとは逆に中位・難しい課題を選択する者が多い傾向がみられた。この結果は、どのように解釈すればよいであろうか。Nicholls (1980) は、成功価と課題困難度の関係を理解していない5歳児では易しい課題を選択する傾向がみられたが、成功価と課題困難度の関係を理解していた7歳児では、易しい課題よりも中位および難しい課題を選択する傾向があったことを報告している。この結果から彼は、より難しい課題での成功がより価値があるという成功価と課題困難度の関係理解が発達するとともに、中位あるいは難しい課題を選択するようになると述べている。本実験で対象とした年長児 (6歳児) は、Nicholls (1980) が対象とした5歳児と7歳児の中間年齢段階にあたる。中間年齢段階にあたる本実験の6歳児の場合には、幼児といえども成功にのみ注意が向く成功志向を脱しつつあり、成功価と課題困難度の関係理解が発達してきていると考えられないだろうか。そのため易しい課題を選択する傾向がみられなかったのではないだろうか。年長児の課題選択は、年少、年中児の課題選択とは異なり、Nicholls (1980) が述べている成功価と課題困難度の関係理解の未成熟および成功志向の点からは説明できないように思われる。

以上、年少児と年長児の課題選択について述べてきた。実験を通して感じたことは、一口に幼児といっても、

その調査結果は実験者の取扱方によって、また微妙な年齢の違いによって変化してくるというものであった。幼児のとらえ方を省みることなしに、実験者の設定した枠組に基づいて幼児の行動を判断したり、幼児のある年齢段階の者だけを対象として得られた結果から“幼児は…”と一般化した結論をだしたりすることは早急なとらえ方といえるのではないだろうか。また、本実験では示せなかったが、実験中に幼児の発する言葉や態度などにもっと留意しデータとして分析できていたならば、“何故、年少児では客観的困難度の把握ができないのか?”といったような行動の裏に隠された幼児の姿をもっととらえることができたのではないかと思われる。今後の課題としていきたい。

引用文献

- Bialer, I. 1961 Conceptualization of success and failure in mentally retarded and normal children. *Journal of Personality*, 29, 303-320.
- 栄島和子 1973 要求水準に関する考察：幼児の要求水準行動 日本教育心理学会第15回総会発表論文集, 174-175.
- Heckhausen, H. 1973 Die Entwicklung des Erlebens von Erfolg und Mißerfolg. In C. K. Grauman & H. Heckhausen (Eds.), *Pädagogische Psychologie 1. Entwicklung und Sozialisation*. Frankfurt: Fischer Verlag. Pp. 95-105.
- Nicholls, J. G. 1980 The development of the concept of difficulty. *Merrill-Palmer Quarterly*, 26, 271-281.
- Sears, P. S., & Levin, H. 1957 Levels of aspiration in preschool children. *Child Development*, 28, 317-326.
- Unzner, L., & Schneider, K. 1984 Erlebte Schwierigkeit und subjektive Unsicherheit im Leistungshandeln: ihre Entwicklung im Vorschulalter. *Zeitschrift für Entwicklungspsychologie und Pädagogische Psychologie*, 16, 323-337.

——1986. 4. 11. 受稿, 1990. 9. 8. 受理——